

『働く、ということ』を読む

表題と写真は佐藤仙務（ひさむ）さんという、19歳で社長になった重度障がい者の物語である。「僕には働く場所がなかった……だから会社を作ろうと思った」

本がウェルネスはやし鍼灸院の受付においてあり、前から気になっていたもので、購入して一気に読んだ。とにかく面白く心に響き感動的である。多くの人に勧めたい。

佐藤さんは脊髄性筋萎縮症という難病を患っている。自力でできることは話すこと、指先を1センチ動かすことぐらいで、1日寝たきり状態になっている。そんな佐藤さんが同じ難病の松元拓さんと「仙拓」という、変わった会社を立ちあげる。Web制作の合同会社である。2人のやり取り、「掛け合い」は絶妙だ。

この会社の定款の一部を紹介しよう。社名の由来である仙（世俗にとらわれない人）+拓（土地を切り開く）のように、未だ見ぬ世界や可能性を発掘し、常に創

造的な企業であり続けること。企業経営と福祉社会を融合させ、新たな社会創りを目指すこと。情報技術の最先端に位置し、人々に新しい感動と利便性を提供すること。

養護学校の青木先生の言葉が佐藤さんの心を動かす。「障がい者の多くは自立を目指す。だが、それは人それぞれの状況によって叶ったり叶わなかったりする。それに対して、自分を律する方の自律ならば、障がいの度合いやなんかに関係がなく行うことができるんだ。これは自分のことを自分でコントロールすること、つまりは自分の置かれた環境や障がいという状況の中で、自分を持って生きることなんだ」

「執筆にあたって、僕には1つ決めていたことがありました。それは単なる『障がい者のドキュメンタリー本』としてではなく、あくまで、タイトルである『働く、ということ』をテーマに執筆をし、今の日本にどこか欠けている『働くことの意味』を問いかける内容にしようというものです。」

佐藤さんは仕事しながら執筆したので、10ヶ月間ほど大変な日々が続いたと書いている。京ちゃんのことを思い浮かべながら、「働く、ということ」を考えさせられた。

(2015年3月23日)

